



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

41

コレット

さすらいの女 蔵書 山田正樹訳

ボーヴォワール

娘時代

朝吹登水子訳

中央公論社

コレット

ボーヴォワール

訳者 片山正樹

朝吹登水子

MÉMOIRES D'UNE JEUNE FILLE RANGÉE  
by Simone de Beauvoir

Originally copyrighted by Librairie  
Gallimard, Paris.

The translation right arranged through  
the Bureau des Copyrights Français.

『娘時代』は日本版權所有者たる「紀伊国屋書店」の  
許可により刊行されたるものである。

昭和44年2月18日初版印刷

昭和44年2月28日初版発行

発行者 山越 豊

本文製版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 凸版印刷株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34



モンマルトルの丘　　パリ北部にあって市街を見おろすモンマルトルの丘は、芸術家の村として独特の雰囲気をもった地区である。コレットが、『さすらいの女』に描かれた日々をすごしたのもこの一画であった。  
（撮影・仁田三夫）



コレット

ボーヴォワール

目次

コレット

さすらいの女

3

ボーヴォワール

娘時代

187

解説

554

年譜

570



さすらいの女



## 第一部

十時半だ……またまた支度が早すぎてしまった。パントマイムの仕事に飛びこむ私の手引きをしてくれた、相手役のブラークは、派手な言い回しで、しょっちゅうそれを小言にする。

「やっばり、出戻り娘の素人は、しょうがないな。いつも、どこかに火が付いたみたいでさ！ きみの言うとおりにしてたら、七時半にはメイキャップの下地にかからなきゃならんぞ。オードヴルをまるのみしただけでね……」

寄席と劇場で三年間過ごしても、私は変わりはないかった。いつでも支度が早すぎてしまう。

十時三十五分……化粧台にころがっている何度も読みかえた本か、それとも、衣裳係が私の眉ペンシルをとがらせるのに使っている『パリ・スポーツ』かを開いてみるかしないことには、私は自分自身と、つまり、紫色のアイシャドーを臉に塗りたくった金壺眼で鏡の中からこちらを見つめている、厚化粧の相談相手と、向かい合

ったままひとりぼっちになるわけだ。彼女の頬骨は、庭に咲く草夾竹桃さながらの派手な色だし、唇も、ニスをかけたようにぎらぎらと赤黒い……彼女は、さつきからずっとこちらを見ているが、いまに話しかけてくるにちがいない……きつと、こう言うのだ。

『あんだね、そこにいるのは？ こんなところ、白壁の籠の中にぼつんとひとりぼっちでさ。この壁には、退屈で、いらいらした、外出できない連中が、組み合わさった頭文字を彫りこんで、まわりをいやらしい幼稚な絵で飾り立てているわ。あんだのと同じように赤く染めた爪が、この漆喰の壁に、捨てられた者の無意識の呼びかけを落書きしたのよ……あんだの後ろに、女文字で、マリィと彫りつけてあるでしょ……その名前の尻尾は、勢いこんだ花文字に舞い踊り、叫び声みたいに跳ね上がっている……あんだがこんなところでひとりぼっちだなんて……踊り子たちの脚で、まるで活動している風車小屋の床みたいにゆさぶられ、がたがたうるさいこんな天井の下で。どうして、こんなところに、ぼつんといろのさ？ なぜ、よそに行かないんだい？……』

そう、いま、この時間が、冷静にものごとを考えられる危険な時間だ……だがこの楽屋のドアをノックしてくるか、どんな顔が、鏡の奥からこちらをうかがっている厚化粧の相談相手と、私とのあいだに割りこんでくる

か？……私の友人であり支配者である「偶然」は、またしても、その乱脈な王国から精霊を私のところへ派遣してくださるはずだ。もはや私は、彼と自分しか信用する気になれない。とりわけ彼を。彼は、私があつぷあつぷしている、水から引き上げて、ちようど救助犬のように、いつもその歯でちようびり私の肌を傷つけながらも、私をとらえ、ゆすぶってくれる……だから、もう私は、絶望するたびに、死ではなく冒険を、平凡な、ささやかな奇跡を期待してしまうのだし、それは、ネックレスのように私の一日一日をきらめく綴り糸で閉じてくれる。

これは信仰みたいなものだ。ときにはわざと盲目になつてみたり、猫かぶりの諦念を見せたり、また《すべては私を見捨ててしまった！……》と叫ぶときですら見られる希望への執着などからして、まさにこれは信仰だ。実際、私の支配者である「偶然」が、私の胸中で別の名前をもつ日が来れば、私は立派なカトリック信者になるかもしれない……

なんと今夜は天井が揺れること！ 寒いんだってことがよくわかる。ロシアの舞踊団は暖まりたがっているのだ。彼ら全員がいっせいに、仔豚のように、しゃがれた鋭い声で《ユー！》と叫んだら、十一時十分のはず。私の時計は絶対確実で、一月に五分と狂わない。十時にな

ると私が到着。カヴァリエ夫人が『浮浪児たち』、『別れの接吻』、『ちよいとしたもの』の三つのシャンソンを歌う。十時十分には、アントニユーとその犬たち。十時二十二分、銃声と吠える声が聞こえれば、犬一座の出し物の終わり。鉄製の階段がきしみ、だれかが咳いている。ジャダンが降りてくるのだ。咳き込みながらぶつくさ言っている。一歩ごとにドレスの裾を踏みつけてしまうからで、お決まりのことだ……十時三十五分、ブーティの漫談。十時四十七分、ロシアの舞踊団。そして、いよいよ十一時十分に出演するのは、この私！

私……この言葉を考えると、われにもあらず鏡をのぞきこんでしまう。でも、やっぱり、そこにいるのが確かに私なのだ。目の縁を丸く隈取った青いドーランがもう溶けだしている、この赤紫色に塗った顔……顔の残りの部分も流れてしまうのを待つことになるのかしら？ 鏡に映っている顔のうち、汚ならしい涙の線のように鏡にへばりついている、どろどろの顔料だけしか残らなかつたらどうしよう？……

でも、ここの凍てつくこと！ 私は、水白粉がひび割れている冷たい両手をこすり合わせる。もちろんのこと、暖房装置のパイプは冷えきっている。きようは土曜日で、土曜日のこの小屋では、客席の暖房は、大衆的な観客、騒々しい、酔っぱらった、陽気な観客にお任せしてある



のだ。楽屋のことなど構ってはいられない。

拳骨のノックがドアをゆさぶり、私の耳もびくりとする。開けると、相手役のブラーグが、赤銅色の、きまじめなルーマニアの山賊の扮装をしている。

「ほくらの出番だ、わかってるね？」

「わかってるわ。お待ちかねよ！ 寒くて死にそうなの！」

舞台へのぼる鉄の階段のつべんで、埃だらけの、穏やかな、乾いた熱気が、まるで着心地の良い汚れたオーバーのように、私をくるむ。いつも細かいことに気のつくブラーグが、舞台装置を点検し、舞台奥のライト——夕陽に見せかけるライト——を高くしたりしているあいだ、私は、カーテンに付けられていて光の洩れる覗き穴に、無意識に目を当てていた。

街で人気を呼んでいるこの寄席では、きょうは土曜日で入りがいい。スポットライトの光がそれほど強くないため客席は真っ暗で、平土間の十列目から立見席までのあいだに、ワイシャツのカラーを見つけることのできる人に、五フラン賭けしてもいいほどだ！ あたり一面、赤茶けた煙が立ち込めて、消えた煙草と、指もとまで吸いすぎる安物葉巻のいやな臭いがみなぎっている……その代わり、前栈敷は、四軒の花屋の店先みたいだ……大入り満員の土曜日！ だけど、若いジャダンのえげつな

いい方ですれば、『知ったことかね、あたいが売り上げをいただくわけじゃなし！』だ。

私たちの出番の音楽が始まると、私は気分がすつとして、調子が出て、軽やかに、無責任になる。布で作った露台に頬杖をついた私は、けろりとした目で、間もなくそこに膝をまるだしにして転がることになっている床板の、埃だらけ——靴の泥、ごみ、犬の毛、松脂の粉——の敷物を眺めたり、造花の赤いジュニアウムの香りを嗅いだりする。この瞬間から、私はもうわれを忘れてしまい、すべてはうまくいく！ 私にはわかっていいるのだ、自分が踊っていてひっくり返りはしないことを、踵がスカート裾にからまりはしないことを、そして、ブラーグに突き飛ばされて転ぶものの、けっして肘をすりむいたり、鼻を折ったりはしないことを。私はまじめくさったまま、あの小男の道具方が、芝居の最高潮のときに、装置の後ろから、おならの音を真似て私たちを笑わせるのを、それとなく待ち受けるだろう……烈しい光線が私をとらえ、音楽が私の身振りを指図し、神秘的な規律が私を支配し保護する……すべて好調。

すべてが好調だ！ 一杯聞こし召した土曜日の観客たちは、私たちに騒がしく報いてくれる。ブラヴォーの声や、口笛や、叫び声や、好意のこもったみだらな野次。私は、安物のバンジーの花束を、口の端にいやというほ

どぶつつけられた。流しの花売り女が、紅を溶かした水にひたして染めあげる、しおれた白いバンジー……私はそれを上着の折り返しにつけて退場する。それは、胡椒と濡れた犬の臭いがする。

それにまた、手渡された手紙も一通あった。

小生は平土間の最前列の席にいた者です。默劇における貴女の才能を拝見して、まだほかにも特別の、より一層魅惑的な才能を身につけておられるものと拝察した次第です。今夜小生と夜食を共にして頂ければ幸甚……

《ド・フォンタンジニ侯爵》と署名があった。嘘じゃない。そして、カフェ三角州から書いたものだ……もうずっと前に断絶したものと思われている貴族の子孫が、いったい何人、カフェ三角州に住居を構えているのだろうか……いかに本物くさいけれど、私には、このフォンタンジニ侯爵は、先週、《午後のお茶》だと言つてひとり住いの家に私を招いたヴァリエール伯爵と似たような血筋だという勘が働く。月並なべでんだけれど、でも、そこには、このやくざな界限の、数多いあんなちゃん囃の下に、上流生活への空想的な憧れや、紋章への敬意が育まれていることがわかる。

いつものとおり、私は玄關のドアを後ろ手に閉めて、大きな溜息をつく。疲労の、弛緩の、安堵の、それとも孤独でいる悩みの溜息だろうか？ 考えないこと、考えないこと！

いったい今夜の私はどうしたっていうのかしら？ きっと、この十二月の霧のせいだ。宙に浮いた薄い氷片になって、虹色にぼけたガス燈のまわりに揺れ動き、クレオソートのような味で唇に溶ける霧……それに、テルヌ地区（パリ十七区）の裏側に白々と浮かぶ、この私の住む新聞地は、見るからに気持を消沈させる。

緑色にくすむガス燈に照らされるこの時間の私の家の通りは、まるで、クリームと、砂糖焼きの巴旦杏と、モカ入り甘栗と、黄色いカラメルのごたまぜで、溶けて碎けたデザートの上に豆入りヌガーが浮いているみたいだ。私の住んでいる家にしても、この通りでぼつたり一軒だけで、《ほんとうとは思えぬ様子》をしている。しかし、その新しい壁や薄っぺらな仕切りは、安い家賃で、私のような《独身女》たちに十分に快適な避難所を提供してくれている。

《独身女》であるからには、つまり十把一からげに、家

主たちの、嫌われ者、恐怖の的、爪弾きであるからには、だれでも、見つけた家をそれと決めて、夜露がしのげればよいとし、冷えびえとした漆喰の壁に甘んじなければならぬ……

私の住んでいる家は、ありがたいことに、《独身女》の一群の隠れ家となってくれている。中二階には、ヤングの女社長がいる。《ヤング自動車》だ。その上には、ブラヴァイユ伯爵の非常に《密接な》お友だち。さらに上では、金髪の姉妹が毎日、一人の《工場を経営している立派な紳士》の訪問を受けている。もう一つ階上には、手に負えない自堕落な女が、昼も夜も、鎖をつけないフオックス・テリヤの一群を引き連れている。そして叫び声、ピアノ、歌、窓から放り出される空の酒場。

「この家の恥だわ」と、ある日、ヤング自動車女史のたもった。

さて、一階には、大声をあげもせず、ピアノも弾かず、男性もほとんど迎えず、まして女性の訪問客もない、この私がいる……五階のあばずれ女は騒音を立てすぎるが、私は立てなすぎる。門番のおかみさんは、私に面と向かって言うのだった。

「妙なこつてすね。家におられるのか、おられないのか、わかんないなんて。なんにも聞こえやしないんだから。芸人さんだってこと信じられないくらいですよ！」

ああ！　なんていやな十二月の夜！　暖房器はヨード  
フォルムの臭いがする。ブランディヌは、ベッドに湯  
たんぽを入れるのを忘れているし、私の飼っている牝犬  
にしても、不機嫌で、ぶつぶつ言いながら寒がっている、  
籠から離れもせずに、私にほんの少し白目をむいてみせ  
るだけだ。なんてことだ！　私は凱旋門やイリュミネー  
ションを要求するわけではないが、でも、それにしても、  
も少しなんとか……

部屋の隅々やベッドの下など、どんなところを探して  
みたところで、ここにはだれもない。私のほかにはだ  
れも。寢室の大きな鏡は、もはや寄席でのジブシー女に  
メイキャップした私の姿を映し出したりはせず、そこに  
映るのは……この私だけだ。

だから、いまの私が、あるがままの私だ！　今夜は、  
この全身鏡と差し向かいで、これまで幾度も、私のけ  
たり、受け入れたり、逃げ出したり、また始めたり、打  
ち切ったりした、あの独り言を言わないでは済みそうに  
ない……やれやれ、もういまから、そんなごまかしは無  
駄だとわかっているのに。今夜は眠れそうにもないし、  
読書の楽しみも——ああ、新刊書、乾ききっていないイ  
ンクと新しい紙の香りが、石炭の臭いや機関車や旅立ち  
のことを思わせる、真新しい本！——読書の楽しみも、

自分のことから気をまぎらさせてはくれないだろう……

いまの私は、あるがままの私だ！　ひとりぼっち、ひ  
とりぼっち、それも、おそらく一生涯。もういまからひ  
とりぼっちだなんて！　あんまり早すぎる。私は三十の  
坂を越したけれど、少しもくやしいとは思わない。なぜ  
なら、この顔、この私の顔は、それを活気づける表情や、  
生き生きした視線や、そこに浮かぶ用心深げな微笑があ  
ってこそ値打があるのだから。これをマリネツティは  
「ガイユッ・アッ・ツォルピナ（抜け目のない狐）」と呼んだりする……でも、牝鶏（めんどり）が取  
り押えてしまえるような、悪意のない狐だ！　異と檻の  
ことしか頭にないような、がつがつしない狐……陽気な  
狐、そう、でもそれは、口の端と目尻に無意識の微笑が  
あるからだけのこと……音楽につられて踊り、へとへと  
になってつかまってしまふ狐……

それにしても、私が狐に似ているというのは当たって  
るわ！　だけど、かわいくて上品な狐で、醜くはないの  
じゃないかしら？……ブラーグもまた、私が口をとがら  
して、ものをよく見ようと目をばちばちすると、鼠み  
たいだと言う……べつに不愉快でもない。

ああ、こんな生氣のない口や、しおれた肩や、脚を一  
本投げだして斜めに横たわったこの元氣のない自分の全  
身を見るのは、なんていやなことか！……髪の毛はパー  
マがとれてしまつてばさばさで、これでは海狸のような

つやつやした色合いを取り戻すには、すぐ、長時間ブラシをかけねばならない。目のまわりには、まだ青ベンスルの隈取りが付いたままだし、爪にも、赤い筋が見苦しく残っている……風呂とブラッシングにたっぷり五十分は掛けないことには、すっきりしそうにない……

もう一時だ……何を私は待ち受けているのだろうか？

依怙地な獣を奮い立たせるには、びしりときつい鞭の一撃がいる……だけど、だれも私にそれをしてくれはしない。なぜなら……なぜなら、私はまったくひとりぼっちなのだから！ 私がずっと前から独り暮らしの習慣になっっていることが、この私の姿を抱きかかえている矩形の枠の中で、なんとよく見てとれることか！

ちょっとした訪問客があつてくれたら。御用聞きでもいい、たとえ女中のブランドイヌでもいい、私は、このぐったりした首筋や、この横坐りに憩うている腰を、ちゃんとさせたり、空っぽの両手を、組み合わせることだろう……だけど、今夜の私はあまりにもひとりぼっちだ……

ひとりぼっち！ 私は、見るからに、それを嘆いているように見えるらしい。

「きみは独り暮らしをしてるけど」とブラーグが言ったことがある。「それは、そうしていたいからなんだろ、

ちがうかい？」

たしかに私は『そうしたい』のだし、もっと簡単に言えば、それを望んでいる。ただ、それが……私の年齢では、孤独というものは、自由に酔いしれる酒である日もあれば、また別の日には、苦いソーダ水でもあり、さらに日によっては、頭を壁に打ちつけたくなるような毒薬でもあるわけだ。

今夜は、それをはっきりさせたくない。ためらったままで、そして冷たいシーツのあいだに滑り込むときの身震いが、心配のせいかな安堵のせいかがわからぬままで満足したい。

ひとりぼっち……それも、ずっと前からだ。つまりいまでは私は、独り言や、犬とか暖炉とか、自分の姿とおしゃべりという習慣に甘んじている……それは、隠者や、老いた囚人によく起こる癖だ。でも、私は、まったく自由……それに、私が心の中で語るのは、自分の考えにリズムをつけ、文章にしようという文学的欲求のせいだ。

私の前、鏡の奥底に反映している神秘的な寝室の中に、私は、『落ちぶれた女流作家』として映っている。それに私は、ひとから『舞台に出ている』とは言われるが、女優と呼ばれたことは一度もない。どうしてだろう？ 私をこの仕事の中で位置づけることには、公衆から、そ

して私の友人たちからでさえ、微妙なニヒアンスの丁重な拒絶がある。私が選んだ仕事だっていうのに……落ちぶれた女流作家、これが、みんなに対して私が取らねばならない立場なのだ、この私、もう書きもせず、書くことの楽しみや贅沢を抑えている私が……

書くということ！ 書けるということ！ それは、白い紙を前にしていつまでも夢想することであり、無意識になぐり書きすることであり、インキの汚点のまわりにぐるぐるの円を描いたり、不満足な単語を、字として読めなくなり、空想的昆虫に変身し、蝶々の妖精として飛び立つようなかたちになるまで、引つ掻いたり、逆手を立てたり、触角や脚で飾り立てたりするペンの落書だ……書くということ……それは、銀製のインキ壺の中に映った窓の反映に氣を奪われて宙に浮かした視線であり、死のような幸福感が用紙の上で書いている手を氷結しているあいだ、頬や額に立ちのぼる神聖な熱気でもある。それはまた、時間の忘却、長椅子に沈みこんでの怠惰、そして勝手氣儘な想像の世界であり、そこから私はぐったり疲れて、ぼんやりした頭でわれにもどるが、苦勞の甲斐あって宝物を手に入れており、それをランプの下に丸まった小さな光の輪の中で、新しい紙にゆっくり繰り広げるのだ……

書くということ！ それは、誘いかけるような紙に、

自分の思いのたけを荒々しくぶちまけることだ。それも大急ぎに急ぐため、ときには、手が、それを導こうとするせつかな神様といさかいを起こし、すねてしまふ……そして、翌日になると、熱狂的な時間のうちに奇跡的に開花したはずの黄金の小枝の代わりに、枯れた茨、いじけた花しか見つからない……

書くということ！ それは、無為の人の快樂と苦痛だ！ 書くということ！……ときどき私は、まるで夏夏の渴きのように、書きしるし、描写することへの強烈な欲求を感じる……私はふたたびペンを取り上げる、危険な、落胆させられる賭を始めるために、また、玉虫色に光る、移ろいやすい、すばらしい形容詞を、しなやかな、二つに割れたペン先で捉え、定着させるために……それは、一時的な発作みたい、傷跡のむずがゆさみたいだ……

書くには時間が要りすぎる！ それに、私はバルザックではないんだし……私が築き上げようとするこわれやすい物語は、御用聞きが呼び鈴を鳴らすたび、靴屋が請求書を持ってくるたび、代訴人や弁護士が電話してくるたび、演劇エージェントが、『ちゃんとした人たちが、たつぷり支払う習慣のない連中の家でのお座敷』だと私を事務所へ呼び出してくるたびに、こなごなになってしまふ……